

「映画 “Million Dollar Baby” : 生と死の淵における孤独な決断」

【異色ファイティング・ロマンス】

ゴールデン・グローブ賞(監督賞と主演女優賞)を取ったクリント・イーストウッド主演・監督の映画“Million Dollar Baby”は激辛のファイティング・ロマンスである。この映画は3つの点で異色である。第1に女性プロ・ボクシング映画自体が珍しい。もっとも日本では女性プロ・ボクシングは馴染みがないであろうが、米国では一定の裾野があるようだ。第2に信心深いクリスチャンが「安楽死」というキリスト教規範上のタブーを犯す。第3に結末が徹底的に悲劇的である。かなり悲劇的な映画でも、普通、ラストシーンには希望や救いを暗示するものだ。ところがこの映画にはそうした「救い」が全くない。

【「俺は女には教えない」】

「戦うヒロイン」マギー役はヒラリー・スワンク、彼女のボクシング・コーチのフランキー役がクリント・イーストウッドである。貧しい家に生まれ、家族の愛にも恵まれず生きてきたマギーは、ボクサーになることに夢を馳せる。そうした彼女がある日ボクシング・ジムを経営しているフランキーのコーチ振りに魅了される。彼女はフランキーにボクシングを教えてくれと頼むが、フランキーは「俺は女には教えない」とにべもなく断る。

フランキーの拒絶には背景がある。彼の娘はかなり昔に父を嫌い、家を出て行ったまま、関係が絶たれている。老いたフランキーは娘との関係を取り戻そうと幾度も手紙を書いて送るが、封を開けずに手紙は返送されて来るばかりである。恐らくこれが彼のトラウマとなって、父と娘ほどの年が離れたマギーも敬遠する。また、フランキーは信心深いクリスチャン(おそらくローマ・カトリック)で、片時も聖書を離さない。しかし教会の若い神父とは仲が悪い。教会の神父は教条的な言葉を繰り返すだけで、信者の心の深い悩みと向き合おうとはしない。ここには教条化した教会や宗教へのイーストウッドの批判が込められている。

フランキーに断られてもマギーは勝手にジムの訓練生となり、彼女の一途な粘りにとうとう根負けしてフランキーはボクシングを教え始める。ところが、マギーがプロとしてデビューする直前にフランキーはコーチ役を下りて、ジムの別のコーチに換えてしまう。以前、精魂込めて育てたボクサーが成功の階段を上り始めた途端に、自分を捨てて、もっと羽振りの良いジムに転属したことがフランキーの2つ目のトラウマになっていた。「また裏切られるくらいなら、早めに手を引こう」と思ったのだ。

【「こいつは俺のファイターだ！」】

マギーは新コーチの下でデビュー戦に挑むが、全く冴えない。これを見ていたフランキーは黙っていられなくなってリングの外から口を出し、マギーに指示を飛ばす。コーチが二人になって混乱する中で、レフリーに「どっちがコーチなんだ？」と問われ、彼は答える。「俺がコーチだ。こいつは俺のファイターだ！」フランキーの采配の下で、マギーは生き返ったように戦い、デビュー戦を勝利する。

これを契機に、二人はお互いが自分にとって不可欠の存在であることを確信し、固い信頼で結ばれる。そしてマギーはガンガン勝ち上がって行く。破竹の快進撃を遂げるマギーの躍動感ある戦い振りが、映画中盤の魅力だ。ラブ・シーンは全くないが、二人の男女が双方を自分に不可欠な存在として発見する筋立ては広い意味での「ロマンス」と呼んで良いだろう。

【運命の暗転、絶望への収束】

そしてついにチャンピオン戦に挑む時がやって来た。フランキーに一抹の不安がよぎる。現チャンピオンはとんでもないダーティー・ファイターだった。試合が始まり、果敢に攻めるマギーにチャンピオンは圧される。このまま行けば、勝利はマギーのものかと思われた最中、運命が暗転する。ラウンド終了のゴングの直後、チャンピオンはレフリーの目が離れた一瞬を盗んで、ガードを下げた無防備となったマギーを強打する。不意をつかれた彼女はコーナーに転倒し、運悪くそこに置かれた腰掛用椅子に首を打ちつけて、昏倒する。

マギーの意識が病院で戻った時、彼女は首から下が完全に麻痺して不随意状態になっていた。首の頸椎をひどく損傷したのだ。かろうじてしゃべることはできるが、呼吸さえ機械に依存する状態になってしまう。フランキーは回復手術の出来る病院を必死に捜し求めるが、マギーの身体が再び動くことはないと言われる。

失意の底に沈んだマギーを母と妹夫婦が訪問する。ところが見舞いのためではない。「医療費はボクシング協会が保険で払っているから心配しないで」と語るマギーに、非道な母は「他の親族は一切彼女の治療費に関わりがない」という同意書にサインしろと求める。

マギーの動かなくなった足はやがて壊疽状態となり、彼女は両足を切断される。ついに彼女はフランキーに自分を殺してくれと頼む。呼吸機械さえ止めれば彼女の死は確実だ。彼女を安楽死させるべきか？ 信心深いクリスチャンのフランキーには、安楽死はとんでもない罪悪である。共にジムを運営してきた古くからの相棒役(モーガン・フリーマン)に悩みを打ち明けると「ダメだ。それはおまえ自身の破滅だ」と反対される。教会の神父も「恐るべき罪悪だ」と慄く。

フランキーが悩んでいるある日、マギーは舌を噛んで自殺未遂を図る。首から下が全く動かない彼女には舌を噛むことが唯一残された自殺手段だった。この後、とうとう彼は彼女の安楽死を決意する。薬の入った注射器を持って、彼女の病室を訪れた彼は、呼吸機械を止めて、注射を打ち、マギーが静かにこの世を去るのを見届ける。その後フランキー自身も姿を消し、ジムには戻って来ない…。

【徹底した悲劇性】

なんと徹底した悲劇か！ 確かにロマンスに悲劇性は不可欠の要素のようである。悲しいラブ・ストーリーとして最近のヒット作では“*The Cold Mountain*”(2003年)がある。南北戦争を舞台にしたこの映画で、恋人は南軍の兵士として従軍し、愛し合っただけで間もない二人は離別する。やがて南軍が敗走して、恋人は故郷の彼女のもとを目指し、惨憺たる困難の末にようやく再会し一夜を過ごす。しかしその翌日、敗走兵崩れのならず者に襲われ、恋人(彼)はならず者と戦って相打ちで死んでしまう。この悲劇的な展開でも、一筋の救い・希望をラストシーンは描いている。ヒロインは死んだ恋人の子を身ごもっており、その子が生まれ、戦渦を生き延びた親しい者達が寄り添って暮らして行くシーンがラストである。“*Titanic*”も悲劇的なラブ・ストーリーであるが、それでも彼女を「生きろ！」と励ましながらか死んでいった恋人、その面影を胸に悲劇を乗り越えて生きたヒロインが描かれている。

しかし“*Million Dollar Baby*”には、そうした一筋の救いさえない。マギーがフランキーと巡り合っただけ、ボクシング界を勝ち上がって行く中盤までは「生の躍動」が輝かしい。しかしその輝かしさの分だけ、身体が全く動かなくなったヒロインが「死の淵」に落ち込むことの絶望が強調されている。なぜ監督イーストウッドはこれほど徹底した悲劇を描いたのか？ 信心深いクリスチャンに「安楽死の罪」を冒させた含意は何か？

【激辛風味だった古典悲劇】

ところが振り返って見ると、古典的な悲劇はその悲劇性が徹底している。私の知る限りの中から例示すると、悲劇の古典と言え、まずシェークスピアの4大悲劇「リア王」「マクベス」「ハムレット」「オセロ」である。いずれも救いのない悲劇的なストーリーが徹底している。ラブ・ロマンス系の「ロミオとジュリエット」も、ご存知の通り最後に二人とも死んでしまう。更に遡って、ギリシア古典悲劇の代表作の「オイディプス王」はどうか。「自分の息子に殺されるであろう」との神託を受けた王が、生まれた子供を捨てる。しかしその子(オイディプス)は拾われて生き延び、ひよんなことから自分の父とも王とも知らずに旧王を殺し、その妻である自分の母と交わってしまう。真相を知った母(后)は自殺し、最後に自分が犯した恐るべき事態の全容を知った主人公オイディプス王は自分の目を突き刺しながら、慟哭する。絶望的な闇に向かって収束するストーリーだ。

そう考えると、悲劇的な展開の中にも救いや希望を含意した物語仕立ては、大衆観客をほっと安堵させるために生み出された比較的現代の様式なのかもしれない。古典悲劇はおしなべて悲劇性が徹底した「激辛風味」だったと言える。クリント・イーストウッドはそうした現代仕立ての「甘味」(救いや希望の含意)を排除して、古典的な激辛仕立ての悲劇を製作したのだ。信心深いクリスチャンがキリスト教の絶対的なタブーのひとつである「安楽死」を冒さざるを得ないように追い込まれて行くのも、オイディプスの父親殺し、母との交わりという所業に匹敵する悲劇のプロットであろう¹。

【なぜ人は悲劇を愛好するのか？】

では、このような悲劇をなぜ人々は愛好するのであろうか？ これについてはアリストテレスの悲劇に関する「カタルシス(catharsis)」理論があり、現代に至るまで基本的にこれを超えた説明はなされていないようだ。カタルシスは、ギリシア語の「カタルシス(katharsis)」で、元来は医学用語で、薬剤を用いて吐瀉ないし下痢を起こさせる浄化作用のことだそう。アリストテレスは、悲劇の効果、あるいはそれが受容されることの説明として「カタルシス」を語った。一言で言うと、悲劇が愛好されるのは、観客が悲劇の主人公に自分を重ねあわせ、そこに生じる悲しみ、苦悩、恐怖に同調し、一喜一憂することで、観客の心の中にある同様のネガティブな情動が浄化される(カタルシス)作用があるからだと言われた。

心理学では、カタルシスは心理治療のひとつであり、人間の無意識の内に抑圧されている苦悩や悲しみ、恐怖などを伴った体験記憶を、想起、言語化すると、その体験に伴っていたネガティブな感情や葛藤も言語表現とともに表出され、「溜まっていたものが排出」されるように心の緊張が緩和すると言う。強い悲しみ、苦悩、恐怖を伴った体験は誰でも忘れてしまおうとする。しかし一見忘れたように見えても、その体験がもたらした傷心(トラウマ)は無意識の底に堆積し、心の緊張の源泉となり、情念と思考の流れを束縛する。その緊張と束縛から抜け出すためには、ネガティブな体験を想起して、言語や絵画表現として表出することで、自覚的な認識に切り替える必要があるのだろう。もっと簡単な例で言うと、恥ずかしくなるような失策をしでかした時に、酒でも飲みながら、親しい同僚や友人相手に「俺、馬鹿なことやっちゃってさ～」と語ってしまうと、すう～と気が楽になる。そんな体験は誰にでもあるだろう。(え？ないって？そりゃ、あなた危ないよ。)

¹ イエスの受難、苦悩を生々しくこれでもかとおぼかりに描いた“The Passion of Christ”も悲劇の徹底性において共通する。“Passion”は精神的な苦悩のみでなく、イエスが受けた極限的な肉体的苦悩を描いた点にユニークさがある。監督メルギブソンはイエスの復活のラストシーンをさりげなく僅か10秒のカットで済ませてしまう。これも復活のシーンを神々しく重厚に描くことで「極限の苦悩体験」が安易に解消してしまうことを許さないための構成であろう。

従って、悲劇を見ることで、観客の心の中に眠っていた親和性のある悲しみや苦悩、恐怖が揺り起こされ、悲劇を見ながら泣くことで心の底で抑圧されていた情念が放出されるのだろう。観客は上映される悲劇に泣きながら、同時に自身の心に眠っていた「傷心」を想起して泣いているのだ。

【生と死の淵における決断】

しかし幾らカタルシス効果があるからと言っても、悲しみ、苦悩、恐怖だけで映画を作れば陰惨になり過ぎて、現代の大衆に繰り返し受けるとは思えない。そこで現代映画の多くは悲劇性の中にも希望や救いの要素を織り込んで構成されている。観客は恐怖や悲しさに一喜一憂しながらも、最後には少しほっと安堵できるようになっている。

ところがイーストウッド監督派はそうした甘味仕立てを否定して、人生の苦悩を真正面から凝視することを、この映画の中で要求しているようである。教条的な台詞を並べるばかりで、人間の心の苦悩に本気で関わろうとしない教会の神父を嘲笑気味に描いているのは、そうした含意でもあろう。敬虔なクリスチャンに「安楽死の罪」を冒させるのは、人の生と死の淵においては、いかなる既成の宗教的・道徳的な規範も無意味であること、選択はおのれひとりの孤独な決断にかかっていることを暗示しているのかもしれない。

フランキーは愛する者を失い、生涯信じて来た自らの宗教の規範にも背く。しかし私はイーストウッド監督が彼を人生の単なる敗残者として描いている気がしない。この世の生あるものはやがて必ず失われる。マギーは短くも生命の火花を放って戦った。その死を見届けて立ち去る彼の姿に、絶望的な孤独と同時に、一種の気高さを感じるのは私だけだろうか？

以上